

第 187 回友の会 小関越え 自然観察会

芭蕉も通った古道を歩く～山路きて何やらゆかしすみれ草～

日 時 2020 年 12 月 13 日(日)

場 所 京津線上栄町駅～小関峠～京津線四宮駅

天 候 曇り

参加者 一般 43 名（内子ども 3 名）、スタッフ 19 名、合計 62 名

新型コロナで揺れた令和 2 年の最後を締めくくる「小関越え」の道は、滋賀県大津市の長等地区の小関町から小関峠を越え、藤尾地区の横木まで続く道です。東海道を大関越えと呼んだのに対して付けられた名称で、京都から大津の町中を通らずに北陸へ向かうための近道（間道）として利用されました。また、観音巡礼の札所三井寺から京都の今熊野への巡礼道でもあったそうです。江戸時代には、松尾芭蕉が「野ざらし紀行」で伏見から大津に出る際に小関峠あたりで見かけたすみれに心を寄せ、「山路来て何やらゆかしすみれ草」と詠みました。

まずは京阪電鉄京津線上栄町駅に集合です。この京津線は日本で唯一、地下鉄区間と路面電車区間を直通運転する 4 両の電車が走る鉄道路線です。路面を走る電車は 2 両までと決まっていますが、京津線だけ特別。さらに急勾配・急カーブに対応して 4 両全てが電動車という特別設計した電車が走っています。

上栄町駅から北に行くと左手方向に高くそびえた太い幹のケヤキ、その前には『犬塚』と書かれた石碑があり、そこを通り過ぎて西に進んだ高観音（たかかんのん）に向かう階段下で挨拶と注意、人数確認などを行い出発しました。駐車場の片隅にひっそりと咲くタチツボスミレを見て長等公園に行き、そこで、先ほど見てきた『犬塚』と「蓮如さん」とのお話を紙芝居で行いました。550 年も前のお話だそうで、その時に犬のお墓に植えられたケヤキを今見ているのかと思うと、とても感慨深かったです。

小関越えの道は細くて車もよく通るのと、新型コロナ対策のために、4 グループに分けて道々の植物を観察しながら、峠に向かって登っていきました。道沿いには常緑の青々とした草が生えていましたが、ほとんどがツルニチニチソウやミドリハカタカラクサなどの外来種が多かったです。外来種が広がっていないところでは、赤い



高観音の階段下で点呼



紙芝居のはじまり♪



長等公園にて



峠の延命地藏菩薩



サネカズラ



シロダモ



ヤブニッケイの実



店開き 実りの季節色とりどりの実

実をつけるフユイチゴが目立っていました。みんなでプリプリの赤い実をいただき「酸っぱくて甘い」と言いながら冬の散策を楽しみました。同じく真っ赤な実をつけていたのがサネカズラ（ビナンカズラ）です。小関越えでは道中いろいろなところでこの真っ赤に熟したサネカズラの実を見ることができました。

枝先が3つに分かれるシュウブソウがあり、参加者の方に触ってもらっていたら「実が服にひっついたわ」という声が上がりました。道の南側にはヤブニッケイが、北側にはシロダモが多く生えていました。どちらの葉も3行脈が目立つクスノキ科で香りもあり、よく似ている木ですが細長い葉が枝先に集まっているように見え、葉の裏が白いものはシロダモ、そうでないのがヤブニッケイなどと説明をしながら峠に向かいました。チャノキの白い花やイズセンリョウの白い実、アオキの赤や緑の実、ムラサキシキブの紫の実、目に鮮やかなヒヨドリジョウゴの赤い実、イヌホオズキの黒い実など、次々現れる草木に心弾ませながら進んでいくとあっという間に峠に着きました。峠には地藏尊喜一堂という祠があり、延命地藏菩薩が奉られていました。

小関峠を越えて分かれ道のところで、実の弾けた跡が御神輿の飾りのように見えるので、ミコシグサとも呼ばれるゲンノショウコが1mくらいの高さまで大きくなっているのを見て、「ゲンノショウコがこんなに背が高いのは初めて見た」と多くの参加者が驚いていました。オレンジ色のカラスウリの実、紺色の実のまわりに赤い色のガクが残るクサギ、ムカゴや種だけになったヤマノイモ、トゲと毛だらけのコジキイチゴなどを見つけながら下っていくと竹藪。その奥にはカジノキとノイバラが多くある開けた場所があり、そこで昼食をとりました。

昼食のあとの店開きでは、最初に、クスノキ科のクスノキ・ヤブニッケイ・シロダモの見分け方の説明。次に、クワ科のカジノキの葉が和歌を書いたり、茶道の水差しの葉蓋にしたり、また神事と関係している話を聞きました。サネカズラの花の説明。さらに、虫こぶの名前の付け方を聞いたあと実際にアオキの歪んだ実、ヨモギの綿状になった茎の一部の虫こぶ、イノコヅチの茎の節がふくれたものなど、見ながら名前を付けてみました。道々で見つけた葉の裏がビロード感あるハナミョウガの葉。葉の裏が白いサルマメ。食べる

と少し甘いアマチャヅルなどを紹介しました。途中で雨が降ってきたにもかかわらず、参加者の方々はうなずきながら真剣に話を聞いておられました。

昼食場所を出発すると、すぐに琵琶湖第1疏水を造った時の堅坑が現れます。この琵琶湖第1疏水は、明治初期に都でなくなり衰退した京都を復興させるために計画された事業で、さらに外国人技術者に頼らずすべて日本人の手によって行った最初の大土木事業でありました。山の両側から掘っていくほかに、山の上から垂直に穴を掘りそこから山の両側に向けて工事を進めていく堅穴(シャフト)方式を最初に採用して工事の促進を図りました。その堅坑を造るのがいかに大変だったかという説明をしました。

ヒイラギの白い花、清流に生えるクレソン、湖西道路の橋脚下に生えるキウイ、まだ弾けていないマサキの赤い実などを見ながら進んでいくと、大津市藤尾で山の中を通ってきた琵琶湖第1疏水がトンネルを出て地表に現れました。

この琵琶湖疏水沿いでは、「イロハカエデがあんなに真っ赤に色づいているわ!」とか、「もうこんなにサクラの冬芽が大きくなっている!」など、参加者はそれぞれの植物の季節による変化を感じ取りながら散策を楽しまれました。

細川 幾由



堅坑



名残を惜しんでもみじがり



実がすずなりのアオキ



園芸種のムラサキシキブ



フユイチゴ



イズセンリョウ



ハナミョウガ



ゲンノショウコ (ミコシグサ)